

令和元年5月23日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02626

研究課題名(和文) 多文化クラスにおけるクリティカルシンキング育成のためのシラバス構築

研究課題名(英文) Developing Critical Thinking in Multicultural Classes

研究代表者

山田 悦子 (Yamada, Etsuko)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：70600659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：留学生と日本の学生が共に学ぶ英語による多文化クラスと日本語による多文化クラスで、多様な文化的価値観を題材としてクリティカルシンキングを扱う同内容の授業を元にした実証研究を実施した。多文化クラスは国際性の滋養のみならず、クリティカルシンキングの育成の教育環境としても非常に効果的であると言えるであろう。日本の学生にとっては日本語によるコースのほうが、留学生の積極性から自分の意見を表明することの重要性を学んだり、自身の今後の外国語学習への啓発を受けたりで教育効果が高いと考えられ、初年次段階では英語学習の強化よりも先に日本語による多文化クラスで国際性を滋養することを推奨するという提言を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本に限らず、世界各国で大学教育における国際化が推奨されるようになってから久しい。日本の大学において留学生と日本の学生が共に学ぶ教育環境から生み出される教育効果は、国際性の滋養だけでなく、クリティカルシンキングのような思考力の基礎部分の育成にも及ぶと考えられる。また、日本語による多文化クラスによる日本の学生の国際性の滋養、外国語学習への啓発の効果は高く、日本の学生への英語学習の強化による効能、専門授業の英語化(EMI)の導入については、問い直す必要があるであろう。

研究成果の概要(英文)：This empirical study was conducted in multicultural classes where international and Japanese students studied together in a state university in Japan. Classes conducted in English and classes in Japanese with the same syllabi were compared. Based on the qualitative analysis, it can be inferred that for Japanese students, multicultural classes in Japanese is more effective than classes in English in many ways. They are also needed before the promotion of English learning. Japanese students in multicultural classes in Japanese are stimulated by the activeness of international students and inspired by their foreign language skills. Multicultural context can be effective not only in nurturing cultural sensitivity, but also for the development of critical thinking.

研究分野：異文化理解・異文化間コミュニケーション

キーワード：クリティカルシンキング 多文化クラス 異文化間教育 日本語教育 英語使用 日本語使用 日本人学生 留学生

1. 研究開始当初の背景

学問的な汎用的スキル(ジェネリックスキル)のうちの一つであるクリティカルシンキング(批判的思考力)の育成を高等教育で行うことの重要性は広く注目されているが、外国語教育(英語教育)等の単一文化クラス環境の中で行われていることが多い。

本研究では、多様な価値観との接触が既存の自己の価値観を問い直す原動力となる点に着目し、大学の留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスにおける多様性を活用したクリティカルシンキングの育成を目指したシラバスの開発を考案した。

2. 研究の目的

多文化クラスにおけるクリティカルシンキングの授業の実証研究から得られる示唆により、以下の2つの点について探究する目標を設定した。

- (1) 多文化環境とクリティカルシンキング育成との関連性について実証研究に基づいた学問的な体系整理をする。
- (2) 同内容の授業実践を英語使用の場合と日本語使用の場合に分けて行い、多文化クラスにおける使用言語に関する問題について明らかにする。

3. 研究の方法

クリティカルシンキングを扱う同内容の英語による多文化クラスと日本語による多文化クラスを実施し、その授業実践において、授業後の振り返り、学期末レポート、グループインタビュー等、授業を履修した学生を対象としたデータを収集し、基盤データとした。この基盤データは分析の際に研究目的や研究課題、対象を分けて、それぞれに該当するもののみを抽出して扱い、コード化等の質的分析を行った。

他の担当科目との兼ね合いもあり、必修授業という位置づけになっていない多文化クラスの担当は年度に1~2クラス程度が限度であり、当初に予測したような人数バランスでの履修者数が確保できなかつたりで、データ収集に2015~2018年の3年程度を費やした。

4. 研究成果

(1) The American Council on the Teaching of Foreign Languages Oral Proficiency Interview (ACTFL-OPI)試験官(日本語)資格取得

この資格は、多文化クラスの授業内のやりとりが口頭によるインターアクションを中心とすることから、実証研究の大前提として特に非母語話者の口頭運用能力とインターアクションの実効性、ひいてはクラス活動の成否との関連性についても把握しておく必要があると考え、研究期間の2年目までに多くの時間と労力を費やすことになった。英語によるクラス、日本語によるクラスの双方の非母語話者の研究参加者に対して口頭能力の判定を行った。

多文化クラスにおいては非母語話者間の言語運用力のバラつきが大きいことが多いが、言語運用力よりもむしろ非言語的要素がコミュニケーションの成否のカギを握っている可能性があることを実証するため、当資格は非常に有効であったと考えられる。

(2) 論文と学会発表を通じた研究成果の発信

上記の研究目的の一つ目のクリティカルシンキング育成については、大学の初年次教育で習得すべき汎用的スキルの一つである。多文化環境における教育は、異文化を扱う感性の伸長に非常に効果的であると言えるが、日本の学生については日本語によるクラスのほうが無理なく内容に集中することができ、推奨していくことができるであろう。留学生が発する「なぜ」という疑問に今まで当然としてきた日本の慣習を問い直すきっかけを得たり、留学生の問いに対して日本の学生が論理的な論破を試みたり等、クリティカルシンキング育成に向けての豊かなリソースを多文化環境から得ることができると言える。

二つ目の使用言語の問題に関しては、日本の学生にとって日本語によるコースのほうが、言語運用力の問題がないだけでなく、留学生の積極的な態度から自分の意見を表明することの重要性を学んだり、自身の今後の外国語学習への啓発を受けたり、全般的に教育効果が高いと考えられる。よって日本の学生には、教養教育の初年次の段階において、英語学習の強化よりも日本語による多文化クラスで国際性を滋養することのほうが大切ではないかという提言を行った。

数編の論文を現在でも執筆中で、本報告の最終提出期限までに間に合わなかったことは残念であり、反省点でもある。必修ではない授業を対象としたデータ収集に必要なデータ数に達するまでに当初の計画以上の時間がかかったこと、また有効なデータ分析に至るまでにも難航したこと等が原因と考えられる。

研究目的の2番目の多文化クラスにおける使用言語の問題については、「リングフランカの構築」という新たな着眼点が見い出されたことより、2018年度より新規に開始した多文化クラスの英語使用に焦点を当てた新規の科研費研究「多文化クラスにおけるリングフランカとしての英語(ELF)の構築(JP18K00775)」のほうで探究を継続していくこととなり、成果の一部についてはそちらのほうに引き継がれていくことになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

山田悦子、多文化クラスにおける日本の学生の言語行動：使用言語の異なるクラスの比較から、*高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習*、査読有、26巻、2019、11-23
<http://doi.org/10.14943/J.HighEdu.26.11>

〔学会発表〕(計7件)

山田悦子、留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスにおけるリング・フランカの構築、*プリンストン日本語教育フォーラム* (プリンストン大学、米国)、2019

YAMADA, E., Raising the Students' Awareness of English as a Lingua Franca: Pedagogical implications from multicultural classrooms, *Sixth International Language in Focus Conference Language, Research and Teaching in the 21st Century*, Importantne Resort Dubrovnik, Croatia, 2019

YAMADA, E., The Role of Native Speakers in Lingua Franca Communication in Multicultural Classrooms, *The Eighth CLS International Conference CLaSIC* (National University of Singapore), 2018

YAMADA, E., The Shift of the Positions between Native Speaker Roles and Non-native Speaker Roles in Multicultural Classrooms, *11th International Conference of English as a Lingua Franca* (King's College London), 2018

山田悦子、初年次教育における多文化クラスの教育的効果：日本の学生が留学生との協働から学ぶこと、*大学教育学会第39回大会* (広島大学)、2017

YAMADA, E., How a Lingua Franca is Formed through Intercultural Communication in Multicultural Classrooms, *Intercultural Horizons* (University of Rijeka, Croatia), 2017

YAMADA, E., Language Ownership in Multicultural Classrooms, *The Seventh CLS International Conference CLaSIC* (National University of Singapore), 2016

〔図書〕(計1件)

YAMADA, E. & Hsieh, J., *Multilingual Matters, Beyond Language Barriers: Approaches to developing citizenship for lower level language classes*, In M. Byram, I. Golubeva, H. Hui & M. Wagner (Eds.) *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship*, 2016, 81-103

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕(計2件)

山田悦子、留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスにおけるリング・フランカの構築、*プリンストン日本語教育フォーラムプロシーディングス*、2019
<https://pjpgf.princeton.edu/past-forums>

American Council on the Teaching of Foreign Languages Oral Proficiency Interview (ACTFL- OPI)試験管 (日本語) 資格取得、2016

6. 研究組織

(1)研究分担者

該当なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：マイケル・バイラム (英国ダラム大学名誉教授)

ローマ字氏名：Michael S. Byram

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。